**大頂寺**

大頂寺は、1606年に京極家が宮津城を支配していた時に建てられた、浄土宗の寺です。この地域の支配は、関ヶ原の戦い（1600年）で徳川軍に加わった見返りとして京極家に委ねられました。その後、大頂寺はすぐに宮津湾を見下ろす現在の場所に移転し、それ以降の宮津城大名の檀那寺となっています。

宮津を最も長く支配していた一族は、7世代にわたって権力を握っていた本庄家でした。本庄の一族は京都の青果商だったのですが、徳川家三代目将軍である徳川家光（1604年～1651年）の側室である桂昌院（1627年～1705年）の子孫でもあるのです。そして本庄家が桂昌院の血を引く一族であることは、桂昌院の息子の徳川綱吉（1646年～1709年）が五代目の徳川将軍になった時に有名になりました。 大頂寺はこの本庄家とのつながりから、桂昌院が江戸城でいつも祈っていた「念持仏」を受け継いでいます。この念持仏は、本庄一族を祀るその他の物と一緒に、特別に展示室に展示されています。

大頂寺は改装を経ていますが、当初の外観に非常に忠実です。多くの観光客の参拝の目的は、本堂に祀られている阿弥陀如来像です。また隣の部屋には徳川家康から六代将軍の家宣までの御位牌が祀られています。さらに徳川綱吉が書いた書道の巻物などの美術品、衣類や武器などの本庄家の家宝など、さまざまな物が展示されています。